平成22年度

オンリーワンスクール

推進事業(2年次)

研究開発校　報告書

■ スクール・カルチャー「能楽」の取組
■ 加茂湖自然再生を考える取組

新潟県立佐渡中等教育学校

あ　い　さ　つ

県立佐渡中等教育学校
校長　　中村　健郎

本校は、地域の皆様の厚い期待のもと、平成２０年４月に開校し３年目を迎えています。今年度は、前期課程３学年が揃い生徒会活動も本格的に動き始めました。生徒会執行部は、「２２２人で作る佐渡中等～歴史を刻む最初の一歩～」を今年度のスローガンとして掲げ、体育祭や学習発表会等で積極的に活動してきました。色々な場面で、生徒の自主性を感じさせてくれる一年となりました。

さて、本校は、「Ｃａｔｃｈ　ｔｈｅ　ＷＡＶＥＳ!」(夢を叶える波をつかめ!)を校是とし、六年間の一貫した計画的・継続的な教育から生まれるゆとりある学校生活の中で、より一層個性の伸張を図り、幅広い人間形成をめざしています。学校の教育目標には、佐渡の歴史と文化に誇りをもち、豊かな人間性と知性を身に付け、世界的視野で活躍できる人材の育成を掲げています。また、生徒一人一人が自己の大志を実現するために、確かな学力や豊かな人間性、郷土を愛し地域に貢献する資質や態度を身に付けさせることを方針としています。

特に、郷土を愛し地域に貢献する態度や資質の育成については、地域の人材等を活用し、歴史や文化等の理解を深める体験活動として、総合的な学習の時間の中に、「佐渡学」（佐渡の歴史研究、伝統芸能・伝統工芸体験、自然観察等）とスクール・カルチャー「能楽」を設定し、全校生徒で学習してきました。

このような特色ある学校づくりを進める本校は、昨年度から引き続き県の施策である「オンリーワンスクール推進事業」の研究開発校に指定され、佐渡の伝統芸能「能楽」や佐渡の環境を学び、郷土愛を育むための特別活動等の研究開発に取り組んできました。ここに、今年度の取組を報告いたします。

終わりに、この事業を推進するにあたり、ご尽力頂いた多くの皆様方に深く感謝申し上げ、あいさつといたします。

郷土愛

郷土を愛し
地域に貢献する態度の育成

目　次

1　あいさつ　　校長　中村 健郎

3　フォトグラビア
　Ⅰ　本間家定例能
4　Ⅱ　学習発表会
6　Ⅲ　加茂湖エコウォーク

8　オンリーワンスクール推進事業とは
　Ⅰ　オンリーワンスクール研究開発校
　Ⅱ　当校のオンリーワンスクール推進事業設定の背景
　Ⅲ　研究内容
　Ⅳ　スクール・カルチャー「能楽」
9　Ⅴ　加茂湖自然再生を考える取組
　Ⅵ　期待する成果

10　オンリーワンスクール推進事業（２年次）の活動概要
　Ⅰ　コンセプト
　Ⅱ　取組状況
14　Ⅲ　主な成果
27　Ⅳ　今後の課題

28　他校への伝播
　Ⅰ　取組状況
29　Ⅱ　掲載記事

30　編集後記

Catch the WAVES!

平成22年度　本間家定例能

新潟県立佐渡中等教育学校　「素謡　橋弁慶」出演

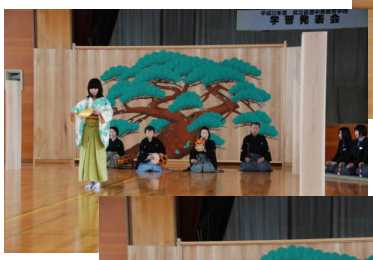
平成22年7月25日　本間家能舞台にて

学習発表会　スクール・カルチャー「能楽」披露

●１年生の「連吟・羽衣」謡デビュー

●２年生の「居囃子・胡蝶」囃子と合わせた謡

● ３年生の「舞囃子・羽衣」舞と囃子と合わせた謡



平成２３年２月１２日
（佐渡中等教育学校　大体育館）

加茂湖エコウォーク　～加茂湖自然再生を考える活動～

○ 加茂湖・自然コース

○ 天王川・朱鷺コース

1	2
3	4
5	6
7	7
8	9

10
11
12
13
14

1　両津博物館で出発式。
2　いざ、出発。
3　樹崎神社の前で。
4　加茂湖漁協の方から、「カキの養殖」の話を聴く。
5　大きなゴミがあるぞ。
6　東工大大学院生から「妖怪・一目入道」の話を聴く。
7　加茂研の方から水中カメラで湖水の魚の映像を見せてもらいながら、加茂湖の生き物の説明を受ける。
8　白鳥発見。
9　ゴールの「能楽の里」は近いぞ。
10　野生復帰ステーション駐車場で出発式。
11　順化ゲージの大きさにびっくり。そこには、テンの進入を防ぐ工夫が。
12　蝶を発見。
13　トキいないかな。
14　地元の方からビオトープの話を聴く。

○ 椎崎・クリーンコース

20	21
22	23
24	24
24	25
26	27

15
16
17
18
19

15　順化ゲージへ移動。
16　順化ゲージの中で環境省の方から話を聴く。
17　温泉水を使った蓮畑のビオトープ。
18　地域振興局の方から生き物のすみやすい河川の工夫について話を聴く。
19　着いてからのスイカが格別。
20　両津クリーンセンターで出発式。
21　両津クリーンセンター。
22　加茂湖のほとりへ。
23　加茂湖揚水機場で加茂湖漁協の方から加茂湖の水質の話を聴く。
24　牛尾神社について、東工大大学院教授から聴く。
25　お疲れ様。ＰＴＡ差し入れのスイカが美味しい。
26　エコウォークの総括をコモンズ研の教授から話を聴く。
27　班長が感想を発表。解散式。

平成22年7月31日実施

オンリーワンスクール推進事業とは

Ⅰ　オンリーワンスクール研究開発校

児童生徒がより主体的に学校を選択することができるよう、全ての県立高等学校、県立中学校および県立中等教育学校が自校の魅力をより一層明確にしたオンリーワンの学校づくりを推進するにあたり、パイロット的な役割を担う学校を「オンリーワンスクール研究開発校」として指定し、取組内容や成果を他校に伝播できる特色ある取組を支援することで、本県の高等学校教育および中高一貫教育の活性化に資するのが、この事業の趣旨である。

昨年度から本校を含め１２校が研究開発校に指定され、今年度も継続して研究開発校として取り組んでいる。

Ⅱ　当校のオンリーワンスクール推進事業設定の背景

現在、佐渡島では、少子高齢化が進む一方で、若者層の島外への流出による人口の減少が大きな課題となっている。佐渡で生まれ育った生徒たちではあるが、郷土の伝統文化、歴史、自然に恵まれた環境にある佐渡の魅力を知らないまま島外に出てしまうことも多い。

佐渡島で唯一の中高一貫教育校である本校では、６年間のゆとりの中で、確かな学力の定着はもちろん、佐渡の魅力に気付かせるとともに、佐渡の抱えている課題についても考えさせ、郷土を愛し地域に貢献する態度の育成を目指している。

そのため、総合的な学習の時間で「佐渡学（佐渡の自然、歴史、文化を学ぶ学習や体験活動）」を充実させている。中でも、開校時から進めているスクール・カルチャー「能楽」の取組と加茂湖水系再生プログラム事業を活かした加茂湖自然再生の取組はオンリーワンの取組である。

Ⅲ　研　究　内　容

特色ある教育課程の開発や特色ある教育活動の研究に取り組み、その取組状況や成果等を他の学校や地域に広く伝播する。なお、指定終了後も継続した取組が行えるような研究を行う。

本校では、特色ある教育活動の研究として、次の２点に取り組む。

１　スクール・カルチャー「能楽」の取組

２　加茂湖自然再生を考える取組

Ⅳ　スクール・カルチャー「能楽」

１　主な活動

(1) 昨年度に引き続き、総合的な学習の時間に、全校生徒で能楽を学ぶ。謡の練習を通して、伝統芸能「能楽」に親しみ、声の出し方や礼法なども併せて学ぶ。

(2) 佐渡で行われている本物の「能楽」を見学、鑑賞する。（１・２学年）

(3) 学習発表会等で「能楽」の謡（全学年）を披露する。

2　スクール・カルチャー「能楽」のねらい

(1) 佐渡の伝統芸能である「能楽」を全校生徒で学び、佐渡の文化について知るとともに、礼儀を身に付ける。

(2) 能楽の謡をマスターし、能楽の発表会等を行い、本校の取組をアピールするとともに、佐渡への愛着を醸成する。

Ⅴ　加茂湖自然再生を考える取組

1　主な活動

(1) 「ローカル・コモンズ再生研究所（＊）」と連携し、加茂湖の自然再生の研究を学ぶ。

(2) 「加茂湖エコウォーク」を行い、身近な加茂湖の環境を知り、自然再生の取組を大学関係者や行政、漁業関係者等から学ぶ。

＊　「ローカル・コモンズ」とは、河川、湖沼、海岸、森林、湿原、棚田など、地域が持続的に維持管理してきた空間と管理のための社会的装置（しくみ、伝統、文化など）を指し、地域共同管理空間と訳しています。

「ローカル・コモンズ再生研究所」は、危機的な状況にあるコモンズを再生し、地域社会を活性化するための思想、技術、理論を実践的な取組を通して明らかにすることを目標にして活動をしています。現在、東京工業大学・九州大学・兵庫県立大学が協力しながら、哲学・工学・社会学の視点から研究を進めています。

2　取組のねらい

(1) この事業に参加し、自然豊かな佐渡を愛する心を育成するとともに、佐渡の環境問題について考える力を付ける。

(2) 大学や研究機関と連携して活動することを通して、大学への関心を高めると共に専門的な学びや研究方法を身に付ける。

Ⅵ　期待する成果

1　故郷佐渡の魅力を実感した生徒たちが、将来、佐渡や新潟、日本を担う人材に成長し、地域を支える人材となることを期待している。佐渡の伝統芸能である「能楽」を学ぶことは、地域理解と地域貢献につながる。国内だけでなく、今後予定されているプナホー学園との交流や国際交流の場でも佐渡や日本の文化等を自信をもって発信する力を付けさせ、教育目標にある「世界的視野で活躍できる人材の育成」につなげていきたい。

2　大学や研究機関と連携した活動を通して、進路に対する目的意識の向上と学習への動機付けを図る。キャリアガイダンスとしての一面と研究の進め方やより専門的な学習の仕方を学ぶ機会になると考える。大学や大学生、研究機関と関わりをもつことは、大学のない佐渡島では大きな意味を持つ。

また、自然再生に向けた社会的なプロジェクトとして日本の最先端の研究に参加しながら、佐渡の環境の現状を見つめ直し、佐渡への愛着と科学的な思考力も高めたい。

オンリーワンスクール推進事業（２年次）の活動概要

Ⅰ　コンセプト

Ｃａｔｃｈ　ｔｈｅ　ＷＡＶＥＳ！　（将来の夢をかなえる波をつかもう）
～知性・人間性・郷土愛を育みながら、大きな成長へ～

【解　説】

「Ｃａｔｃｈ　ｔｈｅ　ＷＡＶＥＳ！」は本校の校是である。（夢を叶える波をつかめ！）という意味。ＷＡＶＥＳには、次のような意味を込めている。

Ｗ＝Ｗｉｓｄｏｍ　　（自ら高める「英知」）
Ａ＝Ａｓｐｉｒａｔｉｏｎ　（夢をえがく「大志」）
Ｖ＝Ｖｉｔａｌｉｔｙ　　（たくましく生きる「活力」）
Ｅ＝Ｅｍｏｔｉｏｎ　　（豊かな心を育む「感動」）
Ｓ＝Ｓｔｕｄｅｎｔｓ，Ｓｃｈｏｏｌ、Ｓａｄｏ（生徒、学校、佐渡）

波がうねりになり、夢が広がることをイメージしている。

佐渡の恵まれた自然や文化の中で、本校の運営方針の３つのキーワード、「知性」「人間性」「郷土愛」を育みながら、世界的視野で活躍できる人材の育成を目指している。

その中でも、この事業では　特に、郷土愛を育むことに焦点をあてて、特色ある活動を進めている。

Ⅱ　取　組　状　況

１　スクール・カルチャー「能楽」の取組

(1)　６月18日～８月27日　謡の練習

・講師（＊神主弐二氏）を招き、能楽を学ぶ。
・１年生は初めの授業で、能楽入門として、能の歴史や佐渡との関わりについて学習する。
・１年生は学級ごと、２年生は学年単位で、「謡本」を基に謡の練習をする。
・１年生は「羽衣」、２年生は「橋弁慶」を練習。３年生の練習はまだ始まらない。

＊神主弐二　氏
宝生流師範・能楽協会会員
新潟県能楽連盟理事
佐渡能楽倶楽部会長

(2)　７月25日　本間家定例能への出演、鑑賞

・佐渡能楽倶楽部主催の本間家定例能に、２年生全員が能舞台に上がり「連吟・橋弁慶」を披露。ほとんどの生徒が能舞台に上がるのは初体験でした。
・扇を持って入場し、地域の人々や観光客など参会の皆様の前で堂々と披露する。
・１年生は２年生出演の「橋弁慶」と、その他舞囃

子や仕舞を鑑賞、本物の能に触れる。
・当校職員２名も仕舞、地謡に出演した。
▶ **「フォトグラビア　ｐ３」参照**

(3)　８月28日　シンポジウム「世阿弥と佐渡の能楽」に出演
・新潟大学人文学部と佐渡市教育委員会連携協定調印記念シンポジウムに出演依頼を受け、学校で取り組んでいるスクール・カルチャー「能楽」を紹介。
・２年生全員が「素謡・橋弁慶」を披露。
・映画「朱鷺島～創作能『トキ』の誕生」を鑑賞。

(4)　12月11日～２月10日　「能楽」の練習再開
・「学習発表会」に向けて、１年生は「羽衣」の練習を再開、２年生は新しい演目「胡蝶」の謡を、３年生は「羽衣」の練習を始める。
・３学年がそれぞれの謡を学年ごと練習。学年に応じてより高度な内容に取り組んだ。
１年生は「連　吟（謡のみ）」
２年生は「居囃子（謡と囃子のみで舞なし）」
３年生は「舞囃子（謡と囃子、仕舞も付く）」

(5)　１月下旬　シテ柱の製作
・能舞台に欠かせないシテ柱を製作。体育館で能楽発表の際、昨年制作した鏡板と合わせてより本物に近い能舞台の演出ができるようになった。

(6)　２月10日　学習発表会「能楽」の申し合せ（リハーサル）
・１年生は能楽室で謡の練習。
・２・３年生は大体育館で囃子（笛・小鼓・大鼓・太鼓）と合わせての練習。
・３年生は、囃子と仕舞、謡を合わせるのが難しい「舞囃子・羽衣」に挑戦した。

(7)　２月12日　学習発表会で「能楽」披露
・１年生は「連　吟・羽衣」を披露
２年生は「居囃子・胡蝶」を披露
３年生は「舞囃子・羽衣」を披露

・大体育館は静けさの中に、能の調べと仕舞、謡が響き渡った。
・鏡板の前での各学年の能楽発表に、参観者から大

きな拍手が送られた。
・能楽の発表時は、180名近くの参観者が集まった。

▶「フォトグラビア　ｐ４」参照

２　加茂湖自然再生を考える取組

（1）６月26日　トキの島国際談義に科学部参加

・アメリカの環境哲学者キャリコット教授との談義に科学部４人と職員３人が参加。
・世界的視野で環境問題に関わっている専門家の話を聞け、佐渡の自然の豊かさを再認識することができた。
・佐渡の環境保全に関わる多くの方々と知り合うこともできた。

（2）７月８日　加茂湖エコウォーク直前談義の実施

・「ローカル・コモンズ再生研究所」の関係者に入っていただき、加茂湖エコウォークの３コースについて、見所や調べたいこと、疑問に思ったことなどを談義。
・生徒は縦割りの１２班に分かれ、昨年度の取組の振り返りから始め、３年生が中心となって運営した。クイズを入れながら、加茂湖エコウォークの動機付けを行った。

（3）７月31日　加茂湖エコウォークの実施

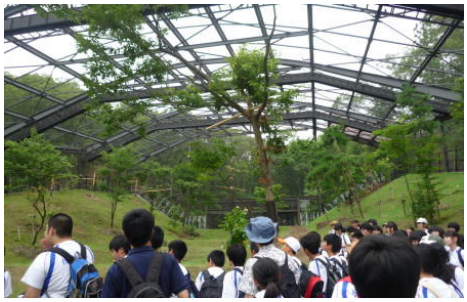
・生徒、保護者、ローカル・コモンズ再生研究所、加茂湖水系研究所、行政や加茂湖漁協等の関係者合わせて、約250名を越える参加。東京工業大学大学院生も10数名参加した。保護者も約20名参加した。

・「①加茂湖・自然コース」と「②天王川・朱鷺コース」、「③椎崎・クリーンコース」の３コースに分れ、加茂湖周辺のゴミ拾いをしながら、要所要所で専門家の方から自然再生やトキ

のすみやすい環境について説明を受ける。

・「①加茂湖・自然コース」では、加茂湖漁協の方から“湖の自然”について説明してもらい、水中カメラからのライブ映像も見せてもらった。東京工業大学大学院研究生からは“妖怪一目入道”のお話を縁のほこらで聴くことができた。

・「②天王川・朱鷺コース」では、環境省の笹渕自然保護官からトキ野生復帰ステーションの説明を受け、“朱鷺の放鳥”についても話を聴いた。また、温泉水を使った“ビオトープ”について地元の方から、“生き物がすみやすい河川整備”について佐渡地域振興局の方から現場で話を聴いた。



・「③椎崎・クリーンコース」では、両津クリーンセンターの方から“島内のゴミ処理”について、加茂湖水系研究所の方からは“加茂湖の水質循環”について、東京工業大学大学院桑子教授からは“加茂湖と牛尾神社”について説明を聴いた。

▶「フォトグラビア　ｐ６」参照

(4)　２月12日　学習発表会で加茂湖エコウォークの感想発表

・エコウォークの取組や参加して感じたこと、考えたことを、代表３グループが発表した。

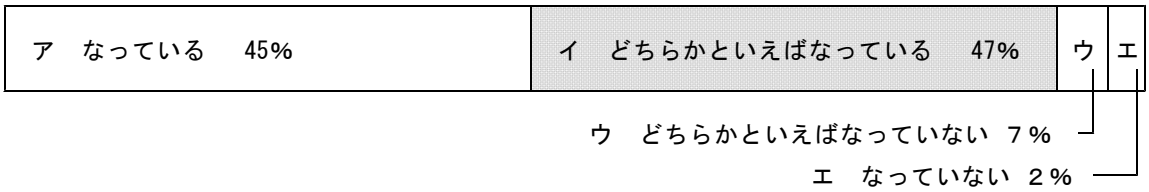
▶「発表原稿　ｐ23」参照

Ⅲ 主 な 成 果

1　スクール・カルチャー「能楽」の成果

(1) アンケート結果より（９月実施、２年生対象）

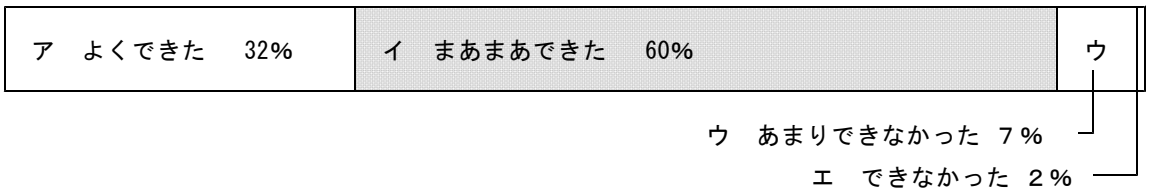
Ｑ１　佐渡の伝統芸能の「能楽」を学ぶことは、佐渡のよさを感じるきっかけになっていると思いますか？



「能楽」を学ぶことで佐渡のよさを感じるきっかけになっていると、９割の生徒が思っている。この値は昨年度の同調査と同じ割合であった。佐渡と能楽の関連を感じ、佐渡のよさに結びつけて考えている生徒がほとんどである。

スクール・カルチャーの取組が着実に浸透してきており、「能楽」を通して郷土「佐渡」への思いにもつながってきている。

Ｑ２「本間家定例能」での「能楽」披露は、自分なりによくできたと思いますか？



◆ 能楽披露を「よくできた」「まあまあできた」と思う理由

・謡を全部覚えられたし、声も出せたと思うから。
・姿勢も気を付けたし、練習の時よりも声を出せたから。
・声も出せたし、みんなそろって謡うことができたから。
・最後の退場がきれいにできたから。

Ｑ３　「本間家定例能」に参加しての感想を書いてください。

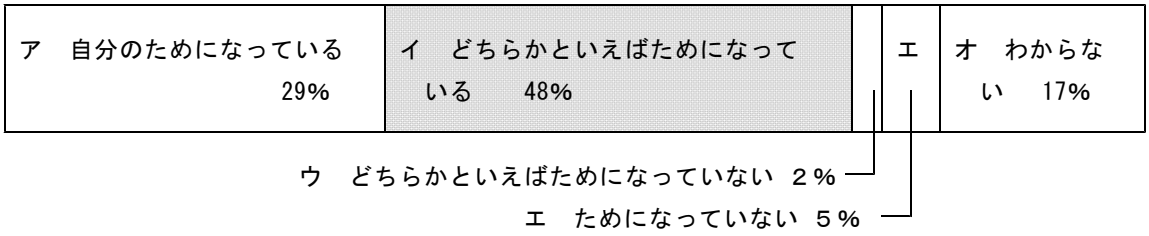
・１ヶ月前の６月から練習を始めて、本当に大丈夫かなと思いました。練習は暑いし足は痛くなって大変でした。本番では、あまり緊張しなかったけど、不安でした。やってみるとみんなの声がいつもより大きくてびっくりしました。私も大きな声を出せたと思いました。「本間家定例能」に出演できたことは、とてもよい経験になりました。
・声が大きく出ていたし、出入りも速くできたので８０点くらいだと思う。
・できるだけ声を出せたのでよかった。あと間違えずに言えたのでよかった。でももう少し声が出ていたらよかったと思う。本間家能舞台で能をしたのは初めてだったので、新鮮な感じがした。たぶん、最初で最後だと思う。
・最初は去年の２年生のようにできるか心配だったけど、本番前日には声も出せたし、覚えることもできて定例能でもちゃんとできたと思う。参加してよかったと思った。
・初めて出演してみて、最初はいろんな人の前で最後まで謡を忘れずに謡えるか不安でした。けど、全員で最後までちゃんと大勢の人の前で謡うことができたのでよかった。やり終わると拍手をもらえました。能の練習はとても足がつらかったけど、やってきてよかったなと思

いました。

・とても緊張したけど、謡を全部覚えられたし、声を出せたのでよかったです。謡を覚えていなかったときは、能は面白くなかったけど、全部覚えると能をするのが楽しくなりました。佐渡の伝統芸能なので、これからも能を頑張りたい。

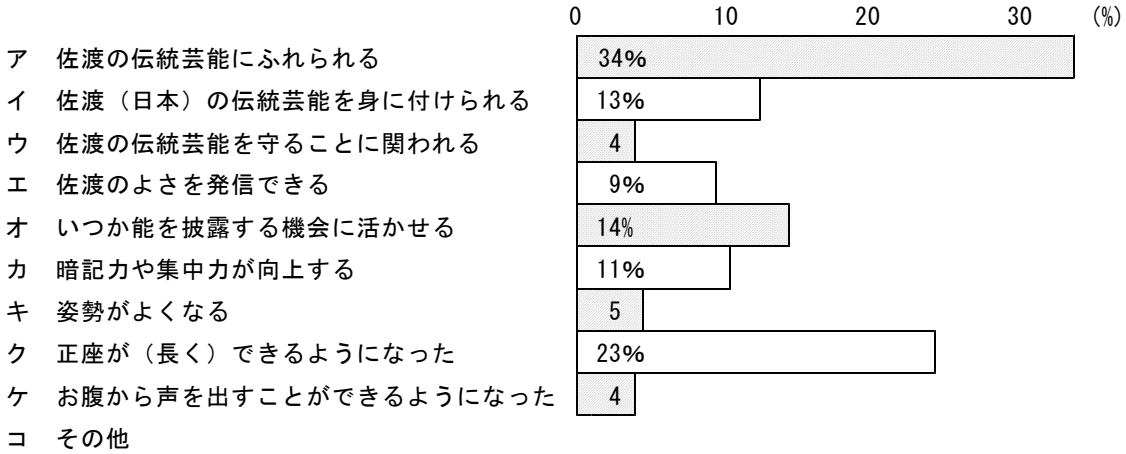
２年生は本間家能舞台に上がり、学んだ謡を初めて一般の人の前で披露した。９割以上の生徒が「よくできた」「まあまあできた」と、自分なりにできたと評価しており、大きな自信になっている。達成感と共に能楽をやってよかったと感じ、もっと頑張りたいという意識を高めている生徒が増えてきた。

Ｑ４　スクール・カルチャーとして「能楽」を学習していることについて、どう思いますか？



Ｑ５　「能楽」の学習をしていて、ためになっていることはどんなことですか？（前問でア・イを選んだ人のみ回答）

（複数回答可、%は生徒全体に対する割合）



昨年度の同調査とほぼ同じ傾向だが、能楽を学習することが「自分のためになっている」「どちらかといえばためになっている」と感じている生徒の割合は９ポイントアップしている。

また、ためになったことでは、「いつか能を披露する機会に活かせる」の割合が増えている。複数回答可であったが、ほとんどの生徒が１つを選択しており、全体的には各選択肢の割合は減少した。

Ｑ６　能シンポジウムに参加して、自分たちで謡を披露し、映画と狂言を鑑賞しました。その中で、感じたこと（感想）を書いてください。

・映画を見て、能の歌詞には様々な思いが込められているんだなと改めて感じることができました。また、狂言を鑑賞して、自分たちで考えて作っているのはすごいなと思いました。あと昔の言葉も覚えていたのもすごいと思いました。謡の披露では少しそろわなかったところがあったけど、よくできたと思います。

・謡をちゃんと謡えたし、声も出せました。他の学校の狂言は感情がこもっていて、見てい

てとても面白かったです。映画は朱鷺の様子を能にしていて、すごいと思いました。佐渡の能を守っていこうとしている気持ちがとても伝わってきました。私たちも守っていけたらいいなぁと思いました。

・分からないことをいろいろ知ることができたので、いい経験になりました。トキの能のことについても、いろいろ知れて楽しかった。自分たちの発表も今まで通りうまくいったと思いました。だけど、１回ずれたのが残念でした。また、機会があったら、大成功することを願います。「世阿弥と佐渡の能楽」に参加してよかったです。

・本間家定例能に参加できなかった分、「演じられた」という充実感があった。講評で「無本なのがすごい」と佐渡中等のことを褒められたのでうれしかった。狂言は「これが能と能の間に演じられたものなのか」と思った。能より現代っぽい日本語でわかりやすかった。映画では、朱鷺についての能を考えてくれる人がいたことがうれしかった。能の台本を作る人はすごいなと思った。

・ぼくはこのシンポジウムで能を謡い、本間家の能舞台でも謡ったので、少し自信がついてきました。緊張は少ししたけど、結構うまく謡えました。そして、大きな声を出せました。いろいろな人に佐渡中等の能を聞いてもらい、佐渡中等では能をやっているということをたくさんの人に知ってもらえたと思います。

新潟大学の荻教授からシンポジウムでの出演依頼を受け、本間家定例能で披露した橋弁慶を発表した。約１ヶ月の間があり、本間家のときよりうまくできたと感じた生徒とうまくできなかったという生徒で二分された。しかし、多くの人の前で発表する経験を通して、能を披露することの自信をつけ、その意義を感じている。

また、シンポジウムで見たドキュメンタリー映画「朱鷺島～創作能『トキ』の誕生」は、能楽や佐渡への思いが込められており、自分たちの能楽を学ぶ意義をより強く感じる機会になっていたようだ。真野中学校の狂言も生徒は興味をもって鑑賞し、よい機会となった。シンポジウムに参加したのは２年生だけであったが、他学年にも映画を見せたかった。

(2) 学習発表会後の感想より（２月実施、全校生徒対象）

〈１年生〉

「初めての能の発表」

私は初めて学習発表会に出ました。一番心に残っているのは能です。

能の「羽衣」の練習は夏からずっとやっていました。最初の頃は１分くらいですぐ足が痛くなって正座がすごく大変でした。それに、能の教本を見てみるとどんな風に謡うのかがまったく分かりませんでした。特に難しかったのは、母音をのばすときに音を上げたりすることです。たくさん練習をしていくうちに、羽衣の最後の部分を覚えることができました。そして、覚えられてくると少し能が楽しくなりました。

発表の前の練習では、神主先生に見ていただくことができなかったので心配だったけど、今までの成果を発揮することができました。練習が大変だったから、うれしかったです。

来年は今年よりレベルの高い能を発表できるようにしたいです。

「がんばった学習発表会」

私は今年初めて中等の学習発表会を体験しました、私が一番がんばったのは能です。中等に入るまでは能はどんなものなのかもよく知らなかったけど、授業で能楽をやっているととても難しいことが分かりました。

最初は正座するので精一杯で謡うことはまったくできませんでした。ですが、回数を積むにつれて歌詞を覚えていき、正座も少しは楽になりました。そうなると能がとても楽しく感じました。

本番では今まで習ってきたことに気を付けて謡いました。みんなが声を出し、81人が１つになった感じがしました。能を謡い終わった後の拍手はとても気持ちよかったです。

「初めての学習発表会」

今年の学習発表会は僕たち１年生にとっては初めての経験でした。

中でも僕が一番がんばったのは能です。最初は慣れない正座や長い曲目に苦労していたのですが、学習発表会１週間前は１日１時間必ずあり、本番前日くらいでやっとできるようになりました。

本番では、広い体育館で大きな声が響き渡るようがんばりました。自分では大きな声が出せたんじゃないかと思います。

でも、２・３年生は僕たちより長い曲目なのに大きな声で謡っていてすごいなと思いました。なので来年は、今年の２・３年生に負けないくらいもっとがんばれたらいいなと思います。

〈２年生〉

「学習発表会」

私は学習発表会で能を発表する前に、思ったことがあります。それは、能を体験し、発表するのは、私たちにとっていいことなのではないかというものです。私たちは学校を通して社会について学び、将来は社会人になります。その時に、いつ能を体験することがあるでしょうか。もちろん佐渡から出て仕事をする人もいるでしょうから、余計に能について触れることはなくなると思います。そうなるとやはり、能を体験するには、関心が必要だと思うし、ここで体験できてよかったのかもと私は思いました。

そんな気持ちもあって、能の授業は真剣に受けようとしていましたが、いざとなると眠くて仕方ありませんでした。ひたすら同じ歌を謡い続けるだけなので、正直しんどくて嫌になりました。そんな中で、学習発表会で発表して、声はあまり出ていなかったかも知れないけど、歌詞は全部頭の中に入っていたので、自信を持って謡うことができました。自分の中でも、結構いい発表ができたと思います。

来年は舞を舞う人も選んでやるようなので、結構楽しみです。来年こそは、声をしっかり出せるようになりたいです。

「学習発表会」

僕は学習発表会で能楽の発表しかありませんでした。（中略）

午後の部はいよいよ能楽です。これは僕も演じました。２年生は「胡蝶」という演目でした。僕たちは能楽を今までスクール・カルチャーの授業でたくさん練習してきました。長い時間正座をして大きな声を出してしっかり練習してきました。そして本番では、囃子の人たちと合わせて演じました。囃子の人たちとは前日に２回くらい合わせただけでした。なので本番に合うか不安でした。しかし本番ではしっかりと囃子の人たちと合って、みんなしっかりと大きな声で謡えました。僕も一生懸命に謡いました。失敗せずにしっかり謡えてよかったです。

それに、１年生と３年生もしっかり謡えていました。特に３年生はすごく長く演じていて、すごく難しそうでした。やっぱり３年生はすごいと思いました。

僕はこの学習発表会で発表する場面は少なかったけれど、みんなの発表を見ていてすごいと思いました。能楽は今までの練習の成果が発揮できてよかったです。来年もまたがんばりたいです。

「学習発表会の感想」

２月12日は学習発表会でした。私たちは今まで、学習発表会のために作品作りや発表練習などたくさん準備をしてきました。

私が発表したのは、能だけでした。能は本間家で発表した演目と違い、今回は「胡蝶」という演目でした。そして、謡だけでなく太鼓などの囃子も付いていました。練習の時はなか

なか声が出なくて大変でした。また、のばす長さや謡う速さなど細かい部分で注意されました。最後の練習の日は、囃子の方々と合わせました。今までの練習の時に謡っていたときとは違い、太鼓の音をよく聞いてその速さに合わせなければいけなかったので難しかったです。最初に合わせたときは全然合っていなくて少し心配になりました。でも、次に合わせた時は合わせることができたのでよかったと思いました。

本番はとても緊張しました。１日休みが入ってしまい、直前練習も囃子の方々と合わせることができなかったので、うまく合わせることができるか不安でした。本番では、うまく合わせることができたのでよかったと思います。少し声が小さくなってしまいました。（中略）

今回の学習発表会では、どの発表もとてもいい発表だったと思います。来年は今より学年が増えるので、今回よりもいい発表にしたいです。

〈３年生〉

「学習発表会の感想」

私が一番がんばったことは、能楽です。１年生から能楽を学んできましたが、今年が最後ということでとても難しかったです。練習の時もみんなやる気がなく、声が全然出ていませんでした。歌も長いので、25分くらい正座しなければいけませんでした。とてもきつくて本番ちゃんとできるかとても心配でした。

本番当日、昼食を食べ終え、２年生が練習しているのを見てとてもすごいと思いました。声がとても大きくて、みんな真剣でした。それを見ていた私たちもがんばりました。とにかく声を出し、歌を覚えました。足はとても痛かったけど、本番成功することができたので、うれしさの方が大きかったです。今年で最後の能が大成功できてとても良かったと思いました。

「学習発表会」

学習発表会は見事成功に終わって良かった。特に、能の練習は前日までなかなか台詞を覚えられず、大変だった。心配だった。

学習発表会は面倒くさいと少し思っていた時もあったが、当日は盛り上がった。（中略）

そして、能の発表が始まった。１・２年生の演目は自分たちが今までに演じたものだが、新しい部分も加わっていて新鮮味があり、さらに上手だった。

３年生の演技は練習の時とは思えなく途中で止まることなくできた。無事終えることができてよかった。演じてみて能の面白さに触れられたように思った。またやってみたいと思う。学習発表会は来年はあるか分からないけれど、上手にできたのでうれしかった。

「学習発表会の想い出」

学習発表会の日、私には心配していることがありました。それは、能の発表です。練習で神主先生と一緒にやる時は、謡本も見ていたので大きな声で謡ができていました。ですが、リハーサルの時、私たちだけでやってみて驚きました。声は小さい、息も合っていない、さらに途中で止まってしまう、最悪の状態でした。昨年の学習発表会でやった胡蝶とは大違いです。その後ももう一度やっても同じ状態でした。私たちの学年はよく、「本番に強い」と言われますが、今回ばかりはダメなんじゃないかと思いました。

ギリギリまで練習していたので、本番はすぐでした。１年生、２年生と次々に終わっていき、ついに自分たちの番になりました。１年生も２年生も上手に謡えていて、ここで３年生が失敗したら、立つ瀬がないと思いました。

謡っている間中、止まらないかとずっとひやひやしていました。全体の声が小さくなると声を大きくして、何とか途切れないよう努めました。みんなも思っていることは同じだったようで、何とかミスすることなく謡い終えることができました。失敗しなくてよかったと思ったと同時に、少し後悔しました。

「学習発表会の感想」

学習発表会の前日、みんなそれぞれ明日の学習発表会に向けて準備をしていた。（中略）私は自信を持って学習発表会には臨めなかった。その理由は、私たちがスクール・カルチャーとしてやっている能が、まだ未完成だったからだ。（中略）

そして、まともに歌詞を覚えられないまま本番を迎えてしまった。しかも、一番声の出るＡ君も欠席。終わった、確実に終わった。本番前の最後の練習でも、歌詞が分からずに止まってしまった。これではいけない。ただ、どうにかしなければと思っているのは、私だけではないようで、自分たちの番がくるまで必死に覚えている人がたくさんいた。

その最後の悪あがきのお陰か、本番では一度も止まることなく謡いきることができた。声はあまり大きくなかったけど、今までで一番のできだっただろう。

私が今回学んだことは、とにかくあきらめなければ、どうにかなるということです。みんなで力を合わせれば、どんなことでも乗り越えられるんだと思いました。

１年生は学習発表会で初めて人前で謡を披露した。２年生も夏の本間家定例能と違う演目を見事、居囃子という形で初めて囃子を付けた能を披露した。６月から能楽に取り組んだ１・２年生とは違い、３年生は12月から学習発表会に向けて練習が始まった。約１年弱のブランクが空いたことになり、モチベーションが課題であった。演目は１年の時やった「羽衣」ではあるが、謡うところは違い、しかも囃子と合わせるのが難しく時間も今までの倍以上と高度な内容になっていた。練習時間もかなり短く３年生にとってはやや負担であったようだ。それでも、３年生の意地で見事やってのけた。

昨年度１期生の能楽発表を鑑賞していた２期生がよい刺激を受け、受け継いでいる。それに続く３期生も先輩たちの発表する姿を見て、スクール・カルチャー「能楽」に積極的に取り組む姿が見られた。佐渡中等教育学校の特色として築き上げられてきている。やりながらその意義を高め、発表する大変さと共にやりがいも感じている。前期生は能楽を学ぶことで、精神的にも大きく成長している。

(3) 学習発表会参観者の感想より（２月実施、保護者・地域等の参観者対象）

Ｑ　発表会（総合・能楽等）をご覧になられての感想や意見がありましたら、お書きください。

・初めて能楽を体験した１年生は声も出ていてよかったです。２年生・３年生も学年を増すごとに味わい深さを感じました。ご指導くださる講師の方、先生方に感謝し、子供たちの努力に感動いたしました。（保護者）

・能の迫力がすごかったです。本物に触れるのはとても良いことですね。（保護者）

・能楽を拝見させていただきました。昨年よりもまた上達し、１年生も初めてなのに立派でした。２年生もよくがんばり、３年生は男子の声がよく響きさすがでした。これからもがんばってください。楽しみにしています。（地域の方）

地域、保護者の皆様から各学年とも立派な発表だったと感想をいただいた。学習発表会に向けての練習時間はそれほど多くなかったが、学年が上がるにつれてより高度になる能楽を披露できた。生徒たちの大きな自信になったことは間違いない。多くの生徒は次はもっとよくしたいと意欲を示している。

囃子方からは「３年生はよく難しいものができた。これができれば、いつでも能を謡ったり舞ったりできます。」と太鼓判だった。「やっぱり生徒たちは素晴らしい。昨年もびっくりしましたが、今年も感動しました。私たちも参加できてとても光栄です。」とお褒めの言葉をいただいた。生徒たちの自信と励ましになった。指導してくださった神主先生からも、「今回の謡はリズムがなく、囃子に合わせるのがとても難しかった。さすがですね。」と、絶賛していただいた。多くの皆様に支えられ、３学年それぞれが大きく成長した。

神主先生からのメッセージを紹介します。

羽衣から羽衣へ
―― 先達を演じ切った３年生 ――

神主　弐二

開校記念式典での一期生の姿が忘れられない。その時のわずか４分ほどの連吟・羽衣が「スクールカルチャー・能楽」の方向を決定づけたと言えるのである。背筋を伸ばした入場。渡辺翼、土屋えりかの確（しつか）りしたシテ謡。やや不揃いな面もあったが無本で見事に謡い終えた８２人の謡。そしてまた整然と舞台を退く姿。その発表は佐渡市長をはじめ多くの来賓の方々から賛辞を頂くことになったのである。

「格に入って格を出でる」。この言葉は、格（型）にはまって、それを尽くして初めて格にとらわれない自由な味わいが出てくるというものだが、能楽の稽古を通してこのことを生徒に伝えたいと考えてきた。これは舞台に出て演ずることを通して身につくと確信している。

２年生の夏、毎年７月の最後の日曜日に行われる本間家定例能に参加することになった。能舞台での初めての出演である。果たして３間四方の舞台に８０人もの人が上がれるのだろうか。そんな手探りからのスタートであった。羽衣よりも長い連吟に挑戦させた。曲目は竹生島。シテの中川翔太がよかった。あの堂々とした謡は大したものだった。シテがいいと地謡がよくなる。地謡はシテを通して謡うものであることを教えてくれた竹生島であった。その発表は能の人たちをすっかり感動させてしまった。「姿勢がいいね」、「なによりも無本というのがすごい」・・・。

そして次は、初めて実施された３月の学習発表会で舞囃子に挑戦するのである。曲目は胡蝶（こちょう）。囃子方は地元の皆さんから応援頂いた。囃子に合わせて謡うのはもちろん初めてのことである。１回の申し合わせ（リハーサル）で翌日は本番という厳しい日程だった。予想通り、やはりうまくはいかなかった。囃子の方々から温かい励ましを受けて申し合わせは終了した。その彼らは翌日の本番には謡い切ったのだ。シテを舞うのは仕舞を習っている末武晴夏。こうして鏡板完成披露を兼ねた発表会は成功し、見に来てくれた多くの人たちに感動を与えることになったのである。

今年、３年生は、最後の能楽の成果を見せる時を迎えた。２回目となった３月の発表会は羽衣の舞囃子（クセからキリまで。途中序乃舞が入る）。前年の胡蝶は大ノリというすべてリズムが刻まれるところであったが、羽衣のクセは平ノリという節でリズムが刻めない。それは大きな挑戦であった。果たしてやれるかどうかと心配したがこれもなんとか彼らはクリアした。シテの末武もよく舞い納めた。

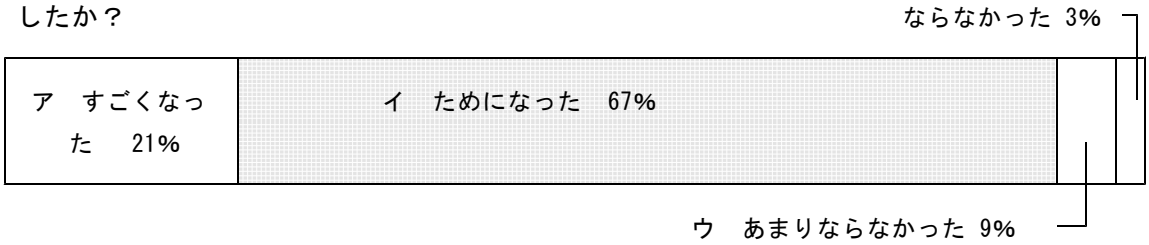
一期生には次々と高い目標に挑戦させてきた。「連吟・羽衣から舞囃子・羽衣へ」。これまで彼らは見事にやり抜いてきた。続く下級生たちの先達となったのである。この３年間の能の経験はどこかで必ず生きると信じている。本当によくがんばりました。

２　加茂湖自然再生を考える取組の成果

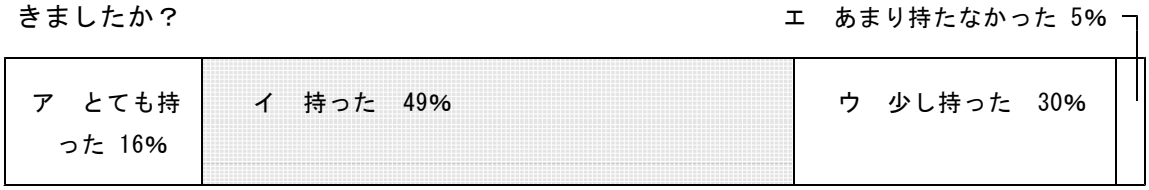
(1) 加茂湖エコウォーク実施後アンケート結果より（全校生徒対象）

Ｑ１　大学教授や大学生、環境省、加茂研、地域の人々などの専門家の話を聞いてためになりま

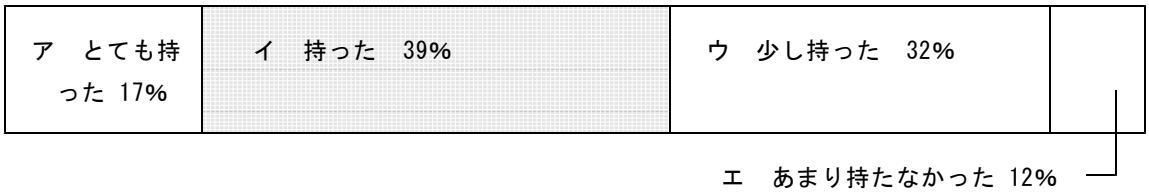
したか？



Ｑ２　大学や加茂研等が取り組んでいる加茂湖再生や佐渡市のゴミ処理等に関心を持つことができましたか？



Ｑ３　大学や研究機関（加茂研、環境省、専門家など）に関心を持つことができましたか？



Ｑ４　佐渡の環境保全や地域のために、あなたができることを具体的に挙げなさい。

・ゴミのポイ捨てをしない、ゴミを拾う、清掃活動に参加する
・ゴミを分別したり、ゴミを増やさないようにする
・ゴミを捨てている人がいたら、注意する
・リサイクル、リユース、物を大事にする
・水や電気を無駄遣いしない、節約する
・環境を守る活動に参加する、他の人に環境について伝える　等

加茂湖エコウォーク直前談義と加茂湖エコウォークでは、大学教授やローカル・コモンズ再生研究所、加茂湖水系再生研究所の研究者、環境省や佐渡地域振興局、加茂湖漁業協同組合の方々など多くの専門家の皆様から専門的な話を聞き、生徒の９割はためになったと感じている。今回は東京工業大学大学院の学生も十数人参加し、生徒にとっても新鮮であった。加茂湖自然再生の取組と合わせて、佐渡の環境問題やゴミ処理の問題も含めて考える機会となった。

佐渡の環境保全や地域のためにできることを３つ以上挙げられた生徒は94%おり、具体的にできることを意識できた。エコアイランドを謳う佐渡市の一員として、生徒一人一人が環境保全の自覚が生まれている。

(2) 実施レポートより

① 加茂湖エコウォークを体験して分かったこと、感じたこと

〈天王川・朱鷺コース〉

・　エコウォークを体験して、トキについて地域の人がいろいろな工夫をしていることが分かりました。使わなくなった田んぼをビオトープにして、トキが餌を取りやすいようにしたり、蓮池に温泉の水を引いて１年中凍らないようにしていたり、びっくりしました。佐渡には日本で唯一コウノトリとトキが一緒に来る場所があって驚きました。

トキの生態なども教えてもらい、とても勉強になったし、トキのことについて興味を持ちました。これからもトキのことについていろいろ調べたいと思いました。（１年）

・　佐渡はトキをすごく大切にしていることが分かった。トキのためにえさ場をつくったり、温泉水を使って冬でもえさが食べられるようにしたり、などしてすごいと思った。「江（え）」という場所は知らなかったけど、見た感じ雑草だらけの田んぼって感じで分からなかった。

また、トキ野生復帰ステーションはすごくでかくてビックリした。本当の自然にそっくりでビックリした。（２年）

・　トキの順化ゲージは大体育館約２個分の大きさでとても広かった。中は天敵に襲われないので安全だが、ほとんど外と同じような空間になって訓練ができるようになっていた。（飛行やエサ取り、コミュニケーションなど）ビオトープもあって魚道からドジョウを入れられ、とてもすごい施設だった。

潟上温泉の近くにトキがよく来る場所があり、それは乳酸菌などを土の下にしいてにおいを出しているからだと分かった。あんな身近な場所にトキがいつも来るのにびっくりしたと同時に、いろいろな人の努力があることを知った。

今回のエコウォークで分かった様々なトキ野生復帰や自然環境再生のための取組に日頃から目を向けたい。普段の行動が環境に悪影響を与えていないか考えたい。いつかビオトープ作りやトキの行動の観察研究などを体験したい。（３年）

〈加茂湖・自然コース〉

・　一番興味深かったのは、妖怪「一目入道」の伝説です。伝説に出てくる「釣針観音」が本当にあることに驚いた。特別な時しか見れないというのは残念、ぜひ見てみたいと思った。

あと、加茂湖には海に負けないくらいのたくさんの魚や生物がいることを知った。タツノオトシゴや鯛の仲間などがいることも分かったし、加茂湖からの生中継も面白かった。こんなことが知れた１日だった。とてもためになったし、とても楽しかった。東京工業大学の人とも仲良くなれた。（１年）

・　歩き始めたらすぐゴミを見つけた。あまりゴミは落ちていないだろうと思ったけど結構たくさん落ちていて、ゴミ袋が重くて大変だった。歩いていろいろな人の話を聞いた。加茂湖はもともと真水だったとか知らないことをたくさん聞けたのでためになった。水中カメラを見たときは魚が結構いてびっくりした。魚の話や貝は大きくならなければ採っていけないとかいろんな話を聞いた。

歩いてみて、加茂湖を再生しようと頑張っている人たちの話を聞いたり、ゴミを拾ったりして、いい時間だったと感じた。ゴールに着いたときも、いいことをしたという気持ちになった。（２年）

・　去年と違ったところや新たに分かったことは、加茂湖の中を見れて、意外に魚がいっぱいいたこと。水の深さが思ったよりも浅くて驚いた。水の色が濃く、濁っているのかと思っていたが、鳥から身を守るため、魚には大事だということ。また、妖怪のコースができて、一目入道の話を聞いた。佐渡にもこんないい（なつかしい昔の）話が残っていると知って、うれしかった。本当に鉤（かぎ）があるのだとしたら、どんなにきれいなのか見てみたい。あと悪いのは人間だと思った。

感じたことは、やっぱり去年と同じで、空き缶を捨てる人が多く、空き缶がたくさんあったこと。（３年）

〈椎崎・クリーンコース〉

・　初めは班の人とうまくいくかな？自分にできることはあるかな？など不安がありました。でも活動をして、班長を初め話をしたことがない人とでも自然に話せるようになりました。クリーンセンターでは、ゴミ処理などの話を聞きました。自分にもできることがありました。それは分別です。心掛けたいと思いました。

カキの養殖の所では、びっくりしたことがたくさんありました。加茂湖はそれほど汚くな

いと聞いて、「エッ」と思いました。調べてみないと分からないというところを知ってよかったです。

エコウォークを通して、考える力、自分にプラスになったことがたくさんありました。（１年）

・　歩いているとたくさんゴミが落ちていて、特にタバコの吸い殻が多かった。ゴミのポイ捨てが結構あってびっくりした。きれいになるようにみんなと拾えたのでよかった。クリーンセンターでは、においがすごくて、ここで働いている人はすごく大変だと思った。人々のために働いているので感謝したいと思った。

加茂湖は金魚の形をしていることを初めて知った。牛尾神社の神様についても教えてもらい、びっくりすることもあった。名前の由来については、“牛の尾っぽ”みたいな形をしていたからだと分かった。（２年）

・　両津クリーンセンターでは一人１日約１kgのゴミを出しているということ、ここでは主に燃えるゴミのみを扱っていて、その他のゴミは佐和田の佐渡クリーンセンターや専門業者に任せていることを知った。

また、加茂湖揚水機の所では加茂湖漁協の方から加茂湖揚水機は加茂湖のペースメーカーのようなもので、加茂湖の水循環にとても重要だということ、よく加茂湖は汚いなどのイメージを持っている人が多いけど、本当はとてもきれいだということも分かった。

さらに牛尾神社では東京工業大学の桑子教授から牛尾神社に祀られている神様のことや昔の人々が洪水を防ぐためその神様を祀ったという話も興味深かった。

今回のエコウォークを通して、ゴミの処理、加茂湖の水循環、加茂湖と牛尾神社の関連がよく分かった。（３年）

② 佐渡の環境のためにしようと思ったこと

・ゴミを捨てない。加茂湖にはゴミがあふれています。それで加茂湖の水は汚くなっています。加茂湖じゃなくても他の所でもゴミは持って帰って捨てようと思いました。

・佐渡にいるたくさんの生き物、朱鷺が安全に暮らせる佐渡にしたいので、自分だけでなくみんなが佐渡の自然にゴミを捨てないで、ゴミのない佐渡にしたいです。そのために進んで、ゴミ拾いをしたり、他にも省エネなど、地球温暖化にも気をつけていきたいです。

・加茂湖は私の家の近くなので、ゴミ拾いをしたりしたいです。また、手軽に加茂湖を観察できるので、時間のあるときに加茂湖を見に行ってみたいと思います。

・ゴミなどが落ちていたら拾ったり、ボランティアに参加したりして、佐渡の自然を保護していきたい。

・一番大切なのは、ゴミを捨てないこと。それからしっかり種類ごとに分けること。みんなと協力すれば、きれいな佐渡になると思う。呼びかけたり、簡単なことでもいいから、自分ができることを探していきたい。

・加茂湖で泳げるようにしようと、環境保全の取組をたくさんしていることを知った。これからはそういう視点で、環境保全の取組にできることならば、参加したい。

・佐渡の環境のために、ポイ捨てや自然を汚すようなことをしないようにしたいです。川を汚すとトキのえさとなる魚がいなくなってしまうので、川を大切にしたいです。そして、トキがたくさんすめる佐渡にしたいです。

(3) 加茂湖エコウォークの説明と感想　（学習発表会での代表発表者の原稿）

天王川コースに参加して

２年 土屋優美　白原希帆　後藤真由子

７月31日土曜日、環境省の方々や東京工業大学大学院の先生や学生さん、加茂湖漁業組合の方々、また保護者の皆さんの協力の下、加茂湖エコウォークが行われました。

「天王川・朱鷺コース」、「加茂湖・自然コース」、「椎崎・クリーンコース」の３コースに分かれて、異学年12班に分かれて実施しました。これから３コースの代表から活動紹介と感想発表をします。

私たちは「天王川コース」で、トキ野生復帰ステーションからスタートし、４か所で専門家の方からお話を聴き、能楽の里を目指しました。

１つ目に野生復帰ステーションで環境省の笹渕さんからお話を伺いました。野生復帰ステーションは約大体育館２個分でとても広いです。エサは人があげるのではなく魚道がありそこからドジョウを入れる仕組みになっていました。また、テンがトキを襲う事故があったため、高圧鉄線を設置し、トキの保護に努めています。ここで分かったことは、トキを育てるということは、多くの人々が関わり、様々な工夫がされているということです。

２つ目にビオトープで地域の方々からお話を伺いました。ビオトープとは使わなくなった田んぼに水をはり、トキのために生き物を育てている場所です。私たちが行ったビオトープは潟上温泉近くにあり、温泉のお湯を利用し、田んぼの水が凍らないように工夫されていました。この工夫はトキが冬でもエサを取りやすくするためです。他にも蓮の花を作ったりしていて、そこはとてもよい環境でした。ここで分かったことは、ここの地域がトキがすむのにはとても適しているということです。

３つ目にトキ交流会館で職員の計良さんからお話を聴きました。計良さんからトキの写真をいただき、トキの生態などを詳しく説明していただきました。ここはいろいろな大学の研究室があったりして、トキの情報の中心地となっていると思いました。

最後に、天王川湖畔で佐渡地域振興局の坂井さんからお話を聴きました。天王川の下流付近では、魚が上流に向かって泳げるように段差を減らしたり、三面コンクリートから自

然に近い状態に整備していました。また、トキのお話も聴きました。トキは人なつっこく臆病な性格だということが分かりました。

これらの説明を聞いて、たくさんの人が佐渡の自然を守るために様々な活動をしているのに、私たちはトキや環境のために何もしていなかったと思いました。これから私たちができることは、日頃からトキや環境に目を向け興味をもち、トキやトキに関わる人々の活動を島外の人たちへ伝えていくことだと思いました。他にも、ボランティアに積極的に参加したり、普段の行動が環境に悪影響を及ぼさないか考えることもとても大切なことだと思いました。

このエコウォークに参加したことは、私たちにとってトキや環境について深く考えるとてもよいきっかけになったと思います。来年度も加茂湖エコウォークに参加し、様々なことを得て、より深く佐渡の自然について知っていきたいです。

加茂湖コースに参加して

１年　石塚彩奈　　鈴木随花

私たちは「加茂湖コース」に参加しました。加茂湖コースは両津郷土博物館をスタートして、加茂湖沿いを歩いて能楽の里まで行きました。私たちは加茂湖漁業組合の方から「カキの養殖」や「湖の自然再生」、東京工業大学大学院の方からは「妖怪・一目入道」、また、エス・ワァルドという会社の方からは「加茂湖の魚」について教えてもらいました。

そして、「カキの養殖」について分かったことを話します。私たちは加茂湖のカキは１年で成長し出荷できることを初めて知りました。普通カキの養殖では２・３年かかるのに対して、加茂湖のカキは栄養が豊富な環境で育つので早く出荷できます。

しかし、昨年の冬は台風や循環ポンプの不具合などが影響したと考えられる赤潮の発生によってほとんどのカキが死滅し、約２億円の損失をしてしまったということも知りました。今年も同様に被害があったと聞きました。

このことを通して考えたことは、加茂湖にはたくさんの栄養があるということと、加茂湖に関係する多くの人たちのお陰で水質がよくなっているということです。もっと加茂湖

の水質がよくなって、たくさんの生き物がすめるようになるといいなと思いました。

もう一つ「妖怪・一目入道」について、分かったことを話します。一目入道とは佐渡に昔からいた加茂湖の主と呼ばれる妖怪です。一目入道はある日、馬にいたずらをしているところを馬主に見つかり捕まってしまいます。一目入道は助けてもらう代わりに瑠璃の鉤(かぎ)で鮮魚を捕らえて馬主に渡すことを約束します。しかし、魚を捕らえるために必要な瑠璃の鉤だけは返してくれと頼みます。それから毎朝とりたての魚が鉤にかけられ置かれるようになりました。でも馬主は瑠璃の鉤をある日持って帰ってしまいました。すると、一目入道は１年に一度馬主の家を襲うようになりました。そこで村人はお堂にこもり大きな音をたてて一目入道を追い返しました。今でも１月16日に「目一つ行事」といってこの行事が行われています。この話を聞いて考えたことは、佐渡にも妖怪がいたということです。そして今も鉤が残っているということを聞いて驚きました。

今回の加茂湖エコウォークを通して、加茂湖にすむ生き物や昔から伝説として伝えられている妖怪について知ることができてよかったです。また、ゴミ拾いをしてみてゴミがたくさんあってびっくりしました。この日はとても暑くて大変でしたが、昼食時に冷たくておいしいスイカを食べることができてうれしかったです。

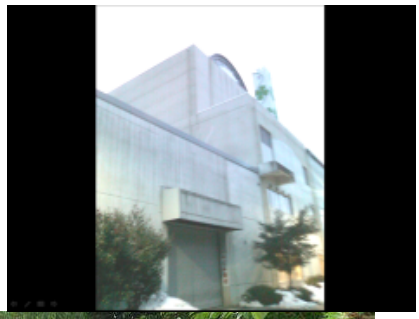
私たちが佐渡の環境のためにしていきたいことは、ポイ捨てをしないでゴミ拾いなどの行事に参加していくことです。そして佐渡の環境がよくなって昔みたいに観光客がたくさん来てくれるようになってほしいです。

椎崎コースに参加して

３年　山田　響　　山田未来

私たちは「椎崎コース」を歩きました。椎崎コースでは両津クリーンセンターを出発し、加茂湖揚水機場、牛尾神社を見学した後、能楽の里を目指しました。

両津クリーンセンターでは、一人が１日に約１kgのゴミを出しているということや、両津クリーンセンターでは主に燃えるゴミの処理をしていて、その他のゴミは佐和田の佐渡



クリーンセンターや専門業者に任せたりしているなどの話を聞きました。

また、加茂湖揚水機場では、加茂湖漁業組合の方か加茂湖揚水機は住吉からパイプによって運ばれた海水を加茂湖に毎秒１ｔもの勢いで放水することによって加茂湖の水を循環させ、生き物が生息できるようにしているので、人間のペースメーカーと似ていて、加茂湖の水質循環にとても重要だということ。加茂湖で養殖されているカキの殻を利用して道路舗装に使用するアスファルトにしたり、カキ殻の主成分のカルシウムを利用して様々な分野への応用が期待されているなどの話を聞きました。

また、牛尾神社では東京工業大学大学院の桑子教授から牛尾神社には洪水を起こしたり、逆に鎮めたりすることのできる神様スサノオノミコトや姉のアマテラスオオミカミと呼ばれる神様たちが洪水を防ぐために祀られているということ。牛尾神社の建つ丘の形が牛の尾に見えることから牛尾神社になったということを知りました。また、現在でも、洪水等の災害が起きたときの避難場所にもなっているそうです。

今回のエコウォークを通して、加茂湖と牛尾神社の関係や佐渡におけるゴミ処理・加茂湖の水質保全について深く知ることができました。

また、加茂湖にたくさんのゴミが落ちていたので、これからはゴミ拾いなど身近なことからやっていきたいと思いました。

これで、加茂湖エコウォーク感想発表を終わります。

今年度で２回目を迎えた「加茂湖エコウォーク」、１学年増に伴いコースを増やし３コースに分けて行った。ローカル・コモンズ研や加茂研、大学院生、行政の方々、地元の漁協の方々の協力でとても中身の濃い充実したものになった。また、３学年がそろったので、談義やコース選択など生徒同士が学年の枠を超えて話し合う技術も向上してきた。

生徒たちは研究機関や大学等にも自然と関心を高めながら、より専門的に佐渡の環境保全について考えられるようになってきている。

Ⅳ 今 後 の 課 題

１　スクール・カルチャー「能楽」について

「能楽」の取組を、今後どのように進めていくか。

現在、総合的な学習の時間を使って、スクール・カルチャーである「能楽」を行っている。総合的な学習の時間が今後減少してくるので、スクール・カルチャーと他の総合の内容を見直したり、精選したりする必要がある。下級生は先輩たちの能楽発表を見て、目標として能楽に取り組む姿が見られている。後期課程に入るとこの活動は時間的に難しくなる。４年生以降はどのようにするか検討中である。

また、能楽の発表をするにしても、囃子方や講師の費用をどう確保するかが課題である。

２　加茂湖自然再生を考える取組について

加茂湖自然再生の取組をどのように継続していくか。

全校で取り組めるものとそうでないものとを検討し、取組内容はより深めていきたい。専門家や大学との関係は、このまま続けていくことで、より太いパイプにしていきたい。

また、科学部や有志でこの研究により踏み込んで参加できる集団ができるとよい。その組織についても今後検討が必要である。

他校への伝播

Ⅰ　取　組　状　況

１　伝 播 の 状 況

(1) 学校ホームページでの取組状況の紹介

・オンリーワンスクールの取組として、①「能楽」②「加茂湖再生」のページで取組を紹介している。

▶「新潟県立佐渡中等教育学校　ホームページ
ＵＲＬ　http://www.sado-ss.nein.ed.jp 」を参照

(2) マスコミ取材と広報

・シンポジウム「世阿弥と佐渡の能楽」の記事は、新潟日報佐渡版(平成22年８月31日付け）に掲載された。

・オンリーワンスクールの取組概要をＵＸ（新潟テレビ21）の「ほっとホット新潟」で紹介された。

・新潟ＮＰＯ協会発行の広報誌「あめつち　11号」にスクール・カルチャーの取組が紹介された。

▶「あめつち　ｐ29」参照

・「島の新聞」に「トキの島国際談義」の記事が載り、当校生徒のコメントが載った。

(3) 学習発表会での発表

・学習発表会では、保護者はもちろん、地域の皆様、小学４・５年生と入学予定の６年生とその保護者、島内小学校・中学校・高等学校の教職員、能楽関係者に広く案内を出し、能楽発表時は約170名が参観した。

・学年ごと「能楽」披露

・加茂湖エコウォークの紹介と感想発表

(4) 報告書の作成、他校への配付

・佐渡島内の小学校・中学校・高等学校、オンリーワンスクール研究開発校、県立中等教育学校等に配付。

Ⅱ　掲　載　記　事

ＮＰＯ法人新潟ＮＰＯ協会発行「あめつち 11号」（2010年　９月20日）

編 集 後 記

県の施策の「オンリーワンスクール推進事業」の研究開発校に昨年度に引き続き指定され、特色ある学校づくりに取り組むことができ、より充実した活動ができた。改めて、関係各位に感謝申し上げます。

この事業の２年次の実践と成果を、「報告書」としてまとめました。生徒たちの様子（写真）や感想を多く載せることで、本校の取組が多くの皆様に伝われば幸いです。

今年度は、前期生１年生から３年生までが揃い、スクール・カルチャー（ＳＣ）の取組も見応えがするようになってきた。そこには、１期生の手本としての先駆的役割がとても大きい。開校記念式典での謡の披露に始まり、本間家定例能、学習発表会とＳＣの成果を発表してきた。２期生・３期生は１期生の姿を見て、目標にし、能楽に真剣に取り組んでいる。スクール・カルチャーを軸に望ましい先輩、後輩の関係が築かれていることをうれしく思う。また、それと同時に、年々生徒が増え学校が大きくなっていくにしたがって、スクール・カルチャーが佐渡中等学校の大きな特色として形創られていることを実感し、喜んでいる。

今年度はシテ柱も完成し、昨年度制作した鏡板と合わせて、素晴らしい能舞台が完成した。学習発表会でこれだけ見応えのあるセットを設置できる学校は世界で唯一であろう。

指導者の神主弐二先生には、３学年の指導となり負担も大きかったと思いますが、生徒たちは「能楽」の面白さと自分たちが能楽をやる意義を見つけています。

加茂湖自然再生を考える取組も２年目となり、より充実した活動ができた。ローカル・コモンズ研究所の桑子教授を始め、豊田博士、高田さん、そして地元の加茂湖水系再生研究所や加茂湖漁業協同組合の皆さん、行政の皆さんのご協力の下、談義や加茂湖エコウォークを無事成功することができました。生徒数が増えても、より高度な内容を学習し、生徒の佐渡の環境に対する知識や考え方は間違いなく進歩していると確信する。

この場をお借りして、宝生流師範の神主先生、東京工業大学大学院の桑子教授、兵庫県立大学の豊田博士始め、「オンリーワンスクール推進事業」に関わってくださった多く皆様に、心からお礼申し上げます。

（ 教 頭　 加藤 雄一郎 ）

平成２３年３月１４日発行

発 行　新 潟 県 立 佐 渡 中 等 教 育 学 校　　校 長　中 村 健 郎
NIIGATA PREFECTURAL SADO SECONDARY SCHOOL
〒952-0005　新潟県佐渡市梅津1750番地

編 集　オンリーワンスクール推進事業担当
加藤雄一郎　石 平 伸 一（ＳＣ）　河 野 理 彦（環境教育）
本宮智恵子　小 林 健 美　松 村 博 生　渡 辺 和 仁
田 中 実 子　佐藤紗和子　石川絵梨子　源 田 洋 平
長 部　賢　湯浅笑美子